本

追い求めたのは革命ではなく「進化」

北村肇
きたむら　はじめ／本誌発行人

『回想1925-2010』
ジョレス・A・メドヴェージェフ、ロイ・A・メドヴェージェフ＝著　佐々木洋＝監訳　天野尚樹＝訳　現代思潮新社
4410円　ISBN978-4-329-00485-7

六〇年代から七〇年代の旧ソ連でスターリニズムの罪を弾劾した、いわゆる異論派としては、すぐにサハロフやソルジェニーツィンの名前が上がる。その一方で、日本におけるジョレス、ロイのメドヴェージェフ兄弟の知名度はさほど高くない。なぜか。サハロフらほど派手な動きや過激な発言がなかったためではないか。ここに兄弟の二十数本の論稿をまとめた本書を読み解くカギがある。二人が追い求めたのは〈革命〉ではなく〈進化〉だったのだ。

「わたしはそれほど大胆な人間ではない。……しかし、すべてが自然に元通りになるのを待っていようとは思わない。わたしは少しずつ、慎重に前に進もうとしている。より堅固な土地を探し、できるだけ多くの場所に、小さくてもいいから、水を通す路をつけたい」（ロイ）

兄弟の父親はスターリンの大粛清によって収容所で死去した。歴史学者のロイは共産党員でありながら自由のために戦い、非共産党員の生物学者ジョレスは英国に追放された後も旧ソ連の内情を西側に伝え続けた。双子ながら性格も行動様式も異なる二人はしかし、漸進的に合法的に真の社会主義を目指す点では一致していた。それは時に〈守旧派〉のレッテルを張られることにもつながった。

近代国家システムの賞味期限が切れ、なにがしか大胆な革命を希求する雰囲気の漂ういまこそ、二人の言説はたとえようのない重みをもつ。下（市民）からの圧力、仲間内での寛容さ、焦らぬこと……。人間は愚かだ。何度でも間違いを繰り返す。それでもあきらめずにより良い社会を追い求める。楽観主義者を名乗る兄弟に感化されたのか、本書を閉じたとき、私の中でわずかだが絶望が薄れていった。